

第1学年 算数科学習指導案

書式は学校の指定に合わせて調整してお使いください。

日 時 令和 年 月 日 () 第 校時
場 所
指導者

1 単元名

「おおきい かず」

2 単元の目標

十のまとまりがいくつ、一がいくつかを位に対応させると、数えた物と数字が対応することを理解する。
十のまとまりと端数を対応させて、大きな数を表すことができる。具体物・図・式を使って方法の理由を説明し、自分の説明を確かめ直そうとする。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①十のまとまりがいくつ、一がいくつかを位に対応させると、数えた物と数字が対応することを理解し、学習した方法を操作や記述に表している。	①十のまとまりと端数を対応させて、大きな数を表す際に、具体物・図・式の対応を根拠として方法を説明している。	①ばらの数え棒を数え、数え直さずに確かめられる置き方を相談する活動で、自分の説明を確かめ、友達の見方を使って修正しようとしている。

4 指導上の考察

(1) 単元について

本単元はA(1)ア(ア)・A(1)ア(イ)・A(1)ア(ウ)・A(1)ア(エ)・A(1)ア(オ)・A(1)ア(カ)・A(1)ア(キ)・A(1)ア(ク)・A(1)イ(ア)・A(2)ア(エ)・A(2)イ(ア)を踏まえ、十のまとまりと端数を対応させて、大きな数を表すことを扱う。既習を確かめる場面は「既習の数の読み書きを具体物で確かめる」とし、そこから「身の回りの物をまとめて数え直す」へ進む。十のまとまりがいくつ、一がいくつかを位に対応させると、数えた物と数字が対応するという関係を、答えを求める手順の根拠として押さえる。ばらの数え棒を数え、数え直さずに確かめられる置き方を相談する活動は、児童が使った方法の根拠を操作や図で確かめられるため、本時の課題とする。学校の年間計画で既習の順序が異なる場合は、最初の活動で必要な理解を確認してから進める。

(2) 児童について

(学級の子どもの様子を先生が書く)

(3) 指導について

指導では、まずばらの数え棒を数え、数え直さずに確かめられる置き方を相談する場面を提示し、何が分かっていて何を求めるのかを児童と確認する。正しい方法を先に示さず、具体物や図で予想を確かめる時間を設ける。特に「棒の本数ではなく束の数だけを答える、端数がない位を詰めて書く」という誤りが出た場合は、束をほどいた状態と束ねた状態を並べ、同じ量であることを確かめることで自分の説

明を見直せるようにする。交流では方法の数を競わず、十のまとまりと端数を対応させて、大きな数を表すために使った根拠を比較する。教師は操作・ノート・口頭の説明を対応させ、表現の得意不得意によって理解の評価が変わらないようにする。

5 指導と評価の計画（全14時間）

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1～2	○既習の数の読み書きを具体物で確かめる。	知①（操作・記述）
第2次	3～4	○十のまとまりを作って数える。	知①（操作・記述）
第3次	5～6 （第5時が本時）	○数える方法を比べる。 ○ばらの数え棒を数え、数え直さずに確かめられる置き方を相談する（本時）。	思①（図と式を結ぶ説明・ノート）
第4次	7～8	○位取りの枠に束と端数を置く。	知①（操作・記述）
第5次	9～10	○空位を含む数を読む。	知①（操作・記述）
第6次	11～12	○数直線と数の順序を調べる。	知①（操作・記述）
第7次	13	○十を単位とした数の見方を使う。	知①（操作・記述）
第8次	14	○身の回りの物をまとめて数え直す。	知①（操作・記述）／態①（初めと修正後の説明の比較）

6 本時の指導（5／14（配分案））

（１）本時の目標

十のまとまりと端数を対応させて、大きな数を表すことができる。

（２）学習過程

段階	学習活動（○主な発問） ・予想される児童の反応	指導上の留意点（◎評価）
導入 （ 分）	○ばらの数え棒を数え、数え直さずに確かめられる置き方を相談する。 ○「何を求めるのか、今分かっていることは何かを、図や実物で示しましょう」 【めあて】十のまとまりと端数を対応させて、大きな数を表す。 〈予想される児童の反応〉 ・前に学んだ方法を使おうとする。 ・何を図に表せばよいか迷い、実物や操作で確かめようとする。	・問題の数値や実物は自校の教材と実測から選ぶ。教科書固有の問題文はこの資料に含めない。 ・束をほどいた状態と束ねた状態を並べ、同じ量であることを確かめる。 ・答えの予想と根拠を分けて記録し、正誤を先に告げない。
展開 （ 分）	○自分の方法を操作・図・式で表し、使った部分に対応させる。 ○「棒の本数ではなく束の数だけを答える、端数がない位を詰めて書くという考えは、どこを確かめればよいですか」 ○「あなたの説明の、図と式がつながる所を示してください」 ○友達の方法と比べ、同じところと違うところを記録する。 〈予想される児童の反応〉 ・十のまとまりがいくつ、一がいくつかを位に対応させると、数えた物と数字が対応することを、操作や図と対応させて説明する。 ・最初の方法では確かめていない部分を見付け、友達の図と比べて説明を直す。	・棒の本数ではなく束の数だけを答える、端数がない位を詰めて書く場合は、答えを教えず、束をほどいた状態と束ねた状態を並べ、同じ量であることを確かめる。 ・考えが書けない児童には、操作した箇所に印を付けてもらい、教師が短い言葉を添えてから本人に説明を戻す。 ・説明できた児童には、条件を変えても方法が使えるかを問い、成立する範囲を確かめさせる。 ・発表は正答の順ではなく、十のまとまりと端数を対応させて、大きな数を表すための根拠が比較できるものを選ぶ。 ◎思① 十のまとまりと端数を対応させて、大きな数を表すことを、図や操作と式の対応から説明している。（説明の記述・発言）

段階	学習活動（○主な発問） ・予想される児童の反応	指導上の留意点（◎評価）
まとめ (分)	○初めの考えに戻り、どこを確かめ直したかを記録する。 【まとめ】十のまとまりがいくつ、一がいくつかを位に対応させると、数えた物と数字が対応する。 ○自分の説明に根拠を付け足し、別の場面で確かめたいことを書く。 〈予想される児童の反応〉 ・自分の図のどこを根拠にしたかを示して説明する。 ・最初の考えから変えた部分を記録する。	・まとめの文をそのまま写すだけにせず、自分の図のどこが根拠かを示させる。 ・誤答から修正した過程も記録する。発言回数や挙手の多さで態度を判断しない。 ◎態①（振り返りと説明の修正過程）

（３）板書計画

上段：めあて「十のまとまりと端数を対応させて、大きな数を表す」。

左：ばらの数え棒を数え、数え直さずに確かめられる置き方を相談する場面の図。既知の量と求める量を区別して示す。

中央：児童の操作・図・式を対応させ、根拠となった部分を同じ印で結ぶ。

右：「棒の本数ではなく束の数だけを答える、端数がない位を詰めて書く」という考えと、確かめ直した結果を比較する。

下段：まとめ「十のまとまりがいくつ、一がいくつかを位に対応させると、数えた物と数字が対応する」。初めの考えから何を直したかを記す。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」 (@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
 みえ先生ラボ

